

魔法のプロジェクト2021 活動報告書

報告者氏名:日置 晋平 所属:大阪府立交野支援学校 記録日:2022年2月26日

キーワード:肢体不自由 アクセシビリティ

【対象児の情報】

・学年 高等部1年

・障害名

肢体不自由 筋ジストロフィー(デュシェンヌ型)

・障害と困難の内容

筋ジストロフィー(デュシェンヌ型)。電動車椅子を使用。本校には中学部3年になる際に地域の中学校の支援学級より転入。会話でコミュニケーションができ、介助を受ける際に的確に要求を伝えることができる。学習面ではひらがなの読み書きはできるが、漢字は小1~2程度。知らない漢字を見て模写できる。家では弟とゲームをして過ごしており、かなりの腕前である。生活リズムは安定しており、ゲーム等に過剰にこだわることはない。恥ずかしがり屋で、興味のある相手にも話しかけられないことが多い。

・使用した機器

iPad iPhone watch chromebook AIスピーカー Pepper

【活動目的】

・当初のねらい

- ① テキスト入力で、メールや文章作成ができる。
- ② 自分に合うアクセシビリティに関する知識を身につけ、活用していくことができる。
- ③ 漠然とした将来に向けて、同じような成人の当事者との交流を持つことで、目標などを見つける。
- ④ ゲームで対戦相手を誘い、その中で交流範囲を広げる。
- ⑤ 対面やオンラインであっても、相手に失礼の無い態度やマナーを守る。

・実施期間 2021年4月~2022年3月

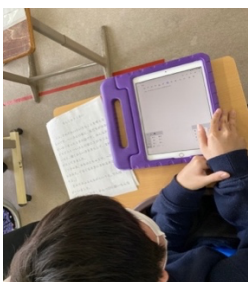
・実施者 日置 晋平

・実施者と対象児の関係 担任と生徒

【活動内容と対象児の変化】

・活動の具体的内容

- ① テキスト入力で、メールや文章作成ができる。



パソコンでの入力と、フリック入力を並行して練習した。パソコン入力は中学部時代から練習しているが、ローマ字打ちは「でい」「ひよ」など「y」や「h」を交えた入力に関しては正確ではなかった。将来、身体機能が減っていくことを踏まえて、フリック入力も並行して練習した。対象生徒は自分のスマートフォンを持っていないが、将来的にスマートフォンでの入力を使って、メール等のコミュニケーションツールを扱えるようになれば、と考えている。

② 自分に合うアクセシビリティに関する知識を身につけ、活用していくことができる。



Amazon Echo を使用して音声操作の練習を行なった。自立活動などで身体のリラクゼーションなどの取り組みの時に、音楽をかけてほしいと要求することがあったが、対象生徒の音楽の好みの幅が狭く、自分の好きな数曲を何度もかけてもらおうとすることが多かった。かけてほしい曲を Amazon Echo を音声操作することで流せるようになるための取り組みを行なっている。初めは恥ずかしがるがあったが、対象生徒の近くに設置すると、自ら音声操作をするようになった。

取り組みを始めた頃から iPad でのアクセシビリティ、例えば Assistive Touch などの導入を考えていた。将来は iPad の画面全体を操作することが難しくなるのではないか、と思える兆候が見られるようになってきているためである。いずれは IOT 機器の操作も体験させたいと考えている。そのことで、自分で家電が操作できるなどの知識と経験をつけていきたい。

③ 漠然とした将来に向けて、同じような成人の当事者との交流を持つことで、目標などを見つける。



対象生徒と話している中で、高等部を卒業した後、自分はどうしたいか、どのような進路があるかが、イメージできていないと感じられた。その理由の一つに自分と同じような障害のある人が社会人になった際に、どのような仕事をしたり、生活をしたりしているかを知らないことが考えられた。そこで成人の当事者にメールや Zoom などインタビューをする取り組みを検討している。実施者の私が以前に支援した生徒2名に連絡し、メールや Zoom など交流を取らせてもらいたいと依頼し、承諾してもらっている。その2名のうち、ひとり是一般企業に就職しており、その仕事の様子をビデオで録画させてもらい、紹介することもできた。また対象生徒たちにビデオメッセージももらうこともできた。そのメッセージの中でコミュニケーションについての大切さが語られており、そのことは対象生徒にも印象に残ったとのことであった。

④ ゲームで対戦相手を誘い、その中で交流範囲を広げる。

対象生徒の得意なゲームでの対戦相手を教員の中から選び、自分で誘いに行く取り組みを行なっている。現在のコロナ禍での対応で、高等部の教員限定にしているが、対象生徒は中学部の教員も声をかけたいと考えている。

1学期終わりに何名かの教員に実際に声をかけて、一緒にゲームで対戦することができている。しかし対戦した教員が本気で対戦するため、現在のところは全敗しており、自分自身のゲームに対する技術を見つめ直すきっかけになっている。

左の写真は電動車椅子に iPad を取り付け、Zoom で通信しながら、対戦相手を探しに行っている時の様子。何か困ったことがあった場合、教員が駆けつけられるようにすることと、対象生徒の様子が遠隔でもわかるようにするためである。

⑤ 対面やオンラインであっても、相手に失礼の無い態度やマナーを守る。

もともと対象生徒は控えめな性格もあり、失礼な態度を取ることは無い。敬語で教員など周りの大人に話すこともできている。しかし、オンラインでのマナーや情報リテラシーなどを学ぶ機会を持ち、将来、オンライン上などでトラブルに巻き込まれないようにしていきたい。

・対象児の事後の変化

学校生活全体の様子

とりあえず、毎日楽しそうにしている。もともと控えめな性格であることから、必要なこと以外の言葉は少なかったが、慣れてきた教員に対して冗談を言ったり、先生がいない場所で、その先生のモノマネをしたりするようになってきている。家庭から登校バスのバス停までの送迎で、大雨などの日は送迎が難しく欠席することがあるが、次の日の連絡帳には「学校に行きたかったのに・・・」と不満を言っていたなどの記述が見られるようになった。

① テキスト入力、メールや文章作成ができる。

ローマ字入力、フリック入力ともに入力速度が速くなってきている。打ち間違えは少ない。拗音、撥音などの入力に関しても、質問することは減ってきている。変換予測も活用する便利さに気づき、入力の速さは速くなったが、文章を組み立てる力が弱い。今後は文章の組み立てなどについての学びを提供していくことが必要である。まずは LINE やメッセージなど短文でのやり取りができる力を身につけられるように、今後も取り組みを続けていく。

② 自分に合うアクセシビリティに関する知識を身につけ、活用していくことができる。



Amazon Echo での音声操作を始めた頃は、アレクサが聞き間違えたり、反応しなかったりすることが多かったが、だんだんと減ってきている。好きな曲をかける時もアーティスト名やアルバム名を言ってから曲名を言うなど、正確に要求を言うようになってきている。11月に検査入院、昼休みに人工呼吸器を装着して1時間休憩を取るという医師からの指示で、昼休みに自由に行動することが難しくなった。その時間に余暇を楽しむ力をつけることを目的に、仰位姿勢でも iPad を操作できるようにタブレットアームを導入した。同時に Assistive Touch の設定を行なった。最上位メニューにホームボタン、音量の上下、スクリーンショットを設定している。また腹上で Bluetooth マウスでの操作できるように設定も行なった。ポインタを見失うことがあることから、ポインタコントロールで表示が見やすくなる設定も行なっている。このことで1時間、誰の助けも求めることなく、iPad で楽しむことができる。

2 月頃になると自分で使い易くするために Assistive Touch の設定の一部を自分で変更していた。

③ 漠然とした将来に向けて、同じような成人の当事者との交流を持つことで、目標などを見つける。

成人の当事者からビデオメッセージを以前にいただいているので、お礼の手紙を書く取り組みを始めている。その際に自分の将来はどんな生活をしたいか?の問いかけに「ゲームをして過ごしていきたい。」と言っていた。しかし仕事の様子などを動画で見せてもらったことから、工夫があれば自分でも何か仕事ができるのではないかと考え始めている様子である。具体的に目標が見つかったわけではないが、今後も様々な情報を与えていくこと、対話の中で、将来像をよりイメージできるように支援していく。

友人と校内で Zoom を使って会話をする取り組みでは、もともと発言が少ないので、Zoom でも発言は少ない。リアクションが少なく、画面から見る様子はじっと聴いている様子に見える。しかし、それでは発言者からは理解できているのか、楽しいのかなどの反応がわかりにくい。リアクションを取ることで会話がより良い方向に進むことがあること、活発になることを体験させることによって、リアクションをとっていきけるようになってほしいと考えている。

④ ゲームで対戦相手を誘い、その中で交流範囲を広げる。



写真① ひとりで行動する際は Zoom で様子を確認できるようにしている。



写真② iPad を電動車椅子に設置した様子



写真③ 誘った先生とゲーム中の様子

本校では過去にひとりで電動車椅子を使って行動していた生徒が在籍していたが、誰も見ていないところで、転倒事故があったことがある。そのため校内で児童生徒がひとりで行動することを禁止している。しかし今回の取り組みは、ひとりで行動する活動である。そのため対象生徒がひとりで行動するには周囲の教員に助けを求めて、全体で見守って取り組んだ。対象生徒は高等部 1 年生である。電動車椅子を社会に出るまでに安全を確保しながら練習できる期間は残り 2 年となることを踏まえて、なるべくひとりで行動できる機会を作りたいと考えている。そのため、Zoom で様子を確認できるようにし、行動してもらった(写真①②)対象生徒はひとりで行動できることが嬉しかったことは写真①からも伺えられる。どの教員に声をかけるかを、担任団で予想していたが、予想と違う教員に声をかけることもあった(写真③)。その予想と違う点に関しても注目していきたい。

その後、後期児童生徒会の選挙で執行委員に立候補した。公約は全校の児童生徒とゲームを通して交流するために「ゲーム大会を開催する。」であった。しかし 11 月に検査入院、昼休みに人工呼吸器を装着して 1 時間休憩を取るという医師からの指示で、昼休みに自由に行動することが難しくなった。また 1 月下旬より新型コロナウイルス感染症が再度広がったことから、対象生徒の家庭が、感染を防ぐ目的で自宅からオンラインで授業参加を希望し、登校を控えていたため、公約の実現はできなかった。

ゲームを誘いに行く取り組みはできなかったが、ひとりで行動する場面は増えた。ほとんど毎日、トイレ後にひとりで教室に戻ってもらうようになった。特別教室の鍵の貸し借りに関しても、職員室にひとりで入り、鍵の受け渡しを職員室にいる教員に頼むこともできている。職員室にいた教員の中で、自分が普段関わりのない教員であっても頼むことができている。

今後もひとりで行動できる範囲や時間を増やしていきたい。そして校外や他の施設でも自分で行きたい場所に行けるように取り組んでいく。

⑤ 対面やオンラインであっても、相手に失礼の無い態度やマナーを守る。

もともと教員に対して失礼なことを言うことがなく、敬語も使える生徒である。そのため大きな変化は今の所は見られない。

同じ大阪府内の支援学校の高等部 1 年生と学校間を通してオンラインで交流を行った。初めて出会う相手にも、いつものように丁寧に話す様子が見られた。また自己紹介の中で、美術の時間に iPad で描いた作品を Zoom で共有して紹介することもできた。その中で少しずつ会話を広げていこうとする様子が見られた。この取り組みは 2 回取り組んだが、その中の「自分が今年がんばったこと」というテーマの発表の際には、発表内容を自分で考え、自分の言葉で、美術の授業で頑張った作品をみんなに見せながら、その制作方法について実演も交えながら発表できた。

コロナウイルス感染症対策で自宅からオンラインでの参加することもあったが、全ての操作を対象生徒一人で行なって参加することができている。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

① **テキスト入力で、メールや文章作成ができる。**

入力方法はほとんどフリック入力で行うようになった。現時点での身体の症状ではキーボード入力も可能であるが、本人が選択するのはほとんどフリック入力となった。今後はその力を使えるように活用を広げていく。

② **自分に合うアクセシビリティに関する知識を身につけ、活用していくことができる。**

設定を行う際に、卒業後のことを意識して、自分で設定できなくても他人に頼める力を身につけてもらうことを目的にお互いに話し合いながら進めた。幸い、現在利用しているヘルパーも ICT に関する知識があり、家庭でも相談しているとのことである。自ら自分にとって使用しやすいように相談していく力が伸びてきている。

③ **漠然とした将来に向けて、同じような成人の当事者との交流を持つことで、目標などを見つける。**

今年度の取り組みでは、目標を見つけられた様子は見られなかった。対象生徒とビデオメッセージをくれた方との力の差が大きく、対象生徒にとってピンと来なかったのではないかと考えられる。しかし「ゲームをして過ごしたい。」から仕事にも興味を持ち始めたことに着目し、その気持ちを育てていきたい。

④ **ゲームの対戦相手を誘い、その中で交流範囲を広げる。**

一人で行動する場面が増えたことで、周りの人に声をかけることは増えてきている。現在は話しかけるという関わり方が増えてきているだけだが、関わる人が増えていく中で、いろいろな支援を求めることも今後増えてほしいと考えている。

⑤ **対面やオンラインであっても、相手に失礼の無い態度やマナーを守る。**

教員に声をかける相手は増えているが、友だちに声をかける様子はあまり増えなかった。ゲームができる同級生が少ないのも原因のひとつではある。この取り組みで、他校の生徒と Zoom で交流する取り組みの中で、自分から話を広げようとする様子が見られることがあったことから、この取り組みを広げて、対面でもオンラインでも交流を広げていけたらと考えている。SNS のマナーや、やり取りのノリみたいなものを身につけられるように支援していきたい。